

『七草集』「薺のまき」私註

石井倫子

一 はじめに

明治二十一年（一八八八）、第一高等中学校予科を終えた二十二歳の子規は「素志を果さんと閑静なる地を墨江に卜し」（『筆まかせ』）、松山に帰省することなく向島で一夏を過ごし、長命寺の桜餅屋・山本屋（月香楼）の二階に仮寓して『續七草集』（以下『七草集』）の創作を始めた。

『七草集』は漢文・漢詩・和歌・俳句・謡曲・擬古文などそれぞれ異なった様式の七巻からなる詩文集で、各巻には秋の七草にちなんでそれぞれ「蘭・萩・女郎花・尾花・薺・葛・瞿麦」の名が付けられている。^①

おのれ去年の夏牛嶋長命寺にかりやとりしぬ。焼くが如き熱さにハ
 なすこともなくて、ひねもす内にたれこめ机に向ひゐれば心ぐるし
 き事いはんかたもなし。されど最早都に帰るべき日も近づきたり若
 し帰りて後、友どちの「日々墨田に耳を洗ひ都鳥を友として何をか

なしつる向嶋の土産ハありやなしや」と問ハれなば何と答へん。い
 とハづかしきこと也と思ひ。かれかこれかと思ひつゞくれとも。薺
 かぬ種よりうつくしき花や実の得らるべき様もなし。されどもつた
 なき文もなきにはまさりなんやと思ふものから、固より素人の即席
 料理は植半、八百松の珍味に飽き給へる諸君子の口になふべくも
 あらず。それよりハ目さきをか□へ、舞臺を廻す方、少しハ御なく
 さみにもやなるべからんと硯の水をまきちらし禿筆のさきに実もな
 き花を咲かせしも肥料コヤシの足らぬ培養ツチカヒによく生キレフデひ立つべき様もなし
 （中略）願はくハ広大の智慧と無料の慈悲を垂れ給ひて七草園の飯の
 あるじ、まだ悟り得ぬ一凡夫の手いれの花を扶け給へや、君だち
 （『七草集を読ミ給へる君だちにまをす』^②）

宮川康雄氏が指摘するとおり、この趣向が向島の名所として名高い百
 花園に触発されたことは確かであり、自らを「七草園の飯のあるじ」と
 称していることからしても、これが若き子規にとって相当に意欲的な創

作の営みであったことは想像に難くない。「朝顔ハ謡曲に擬したるまでにて全く真のものと同じわけにハあらず」(『七草集を讀ミ給へる君だちにまをす』)と子規自身も認めているように、「舜のまき」をいわゆる「新作能」として見るならば、確かに若干の未熟さは否定できない。しかしながら、能のテキストとしての謡曲を自家薬籠中のものとして創作に新しい境地を拓いた点は評価に値する。

小さい時分にはえつほどへぼでく弱味噌でございました。松山で初めてお能がございました時に、お能の鼓や太鼓の音におぢてくたうとう帰りましたら大原の祖父に、武士の家に生れてお能の拍子位におぢる、とそれはく叱られました。

子規の母正岡八重による右の談話は、子規と能との出会いを知る上で非常に貴重な資料である。幼い頃から馴れ親しんでいた能から大きな影響を受けた子規は、能を詠んだ句や能楽についての評論を残しているばかりでなく、明治二十四(五年)にかけては「羽衣」を本説とした「月の都」という小説まで執筆している。子規の文芸活動における謡曲受容に關しては既に岡崎正氏や木佐貫洋氏の論考があるが、本稿ではその初期の作品として「舜のまき」を取り上げ、その構想や特色について若干の考察を加えるものである。

二 「舜のまき」の構想―附・小題「夢幻」のこゝろ―

「舜のまき」の梗概は以下の通りである。

洋行帰りの書生が花見をしようと思い立ち、かつて住んでいた向島の長命寺にやって来て、往時を懐旧しながら桜を一枝手折ろうとする、花守の乙女に止められる。なぜ花守を置くのかと書生に尋ねられ、乙女は次のような物語を語って聞かせる。かつてこの地に桜屋という老舗の桜餅屋が名物の桜餅を商っていたが、向屋という新しい店の出現によって商売不如意となり、これを悲しんだ娘の花子は病の床に就きやがて息絶えた。自分が死んだら桜の木を植えて欲しいという彼女の遺言通りに桜の木を植えたところ、その木は見事な花を咲かせるようになったが、桜屋はますます衰え両親も相次ぎ世を去り、向屋も客足少なくなつてこの地を立ち退き、今はすっかり寂しき里となつてしまった。一部始終を聞いた書生が、自分も桜屋に縁ある者で今遠旅より帰つたところだと打ち明けると、乙女は桜の陰でさめざめと涙を流し、自分は桜子の霊鬼で、御身がはるばる尋ねてきてくれたのを愛しく思い仮に乙女の姿となつて現れたのだと正体を明かし、二人はこの世の儚さを観ずる。突如瞋恚の心が起こつた花子は形相変わり桜を打ち散らしてしまうが、書生の弔いにより成仏する。

ワキの書生は子規自身、シテの花子は子規が寄寓していた山本屋の娘おろく(お陸)がモデルとなつている。子規はこの下宿をかなり気に入つていたらしく、「女郎花の巻」には「櫻の餅をあきなふ主人に代わりてよめる」との詞書とともに、「花の香を若葉じこめてかうはしき櫻の餅家つとにせよ」といささかコマージュシャルめいた歌を残しているほどである。

河東碧梧桐は

『七草集』「薺のまき」私註

この「七草集」を書いた時に、その櫻餅屋の娘と子規との間に、或るローマンズのあつた事は、其の後四五年も経つて後に初めて聞いた（中略）子規は私達後輩に對する位置、と言つたやうな一通りの理性からか、それとも自己の情熱を打込んだ戀として語るには餘り貧弱であつたのか、晩年いろいろな追懷談をして、可なり際どい處まで突込んだりしたけれども、このローマンズに就いては、遂に自ら其の一端にも觸れなかつた。

と述べているが、『七草集』を執筆していた明治二十一年九月、子規と共に寄寓していた三並良と藤野潔（古白）がさる子細あつて子規に隔意を抱き、二人揃つて余所に移つてしまい、これにショックを受けた子規自身も二十四日に月香樓を引き払うという事件が起こつた。子規自身が「女郎花の巻」で「月香樓を去らんとする三日四日前によからぬ噂の聞えしより頭の病も何となく重りし心地せらる されとこゝにと、まらハいよく癒えがたかるへしと思ひ一日も早く都に帰らんと心を定めける」と吐露しているように、ひと夏のうちに子規とおろくとの間には「よからぬ噂」が立つてしまつたらしい。⁷友人から冷やかし半分はこの噂を聞かされた子規は「刈萱のまき」で次のように必死の釈明をしている。

いふまでもなく人間ハ木にあらず又石にもあらず 宝の山にいりて一点の欲心なきハ悟りて後にあらされハあたはず、さればとて手を空しくして、やハか帰るへきといふはあまりにあさましき凡夫の心なり かりにも世の常の人と生れて人倫五常の教を聞き逢ひ難き佛法の世にあひ西の國の聖のふミも讀ミし身の あるまじき情の起らバとてそをおさゆることのならざるべきや このところを酌ミわ

けて思ひかへし給へかし またわけていふへきハ彼人の身の上なり たとひ我身のぬれ衣ハ忍び得へきとするも かゝるうき名のたちそめてハ口善悪なき世の人のいかなることをや傳ふらん いさぎよきかの人の心も我ために濁るさへ氣の毒と思ふに つひにハあきなきことまたげになりもやせん といとおぞましくも思ふなれ。よしツの上ならぬを と語れば友は笑ひて いかによしらず といひつゝ、帰りぬ

「刈萱のまき」はこれを読んだ友人達から『七草集評』⁸で、「刈萱の巻ハ已に諸子のタツブリと評とか言へるものを下されたれバ別に寐言をつかぬこそよけれ」（梨の屋つぶて）「大人の心意如何を察せざる輩に示すに此巻を以てせば大人が清淨潔白の心根を明かすに足るべし然れども大人を熟知し大人の潔白なる底意を知るものに示すにハたゞに冤を雪ぐの要器とならざるのみならず或ハ蟻穴となりて大堤を壊るにも至らんかと畏るゝなり」（秋の王）「唯々刈かやの一段風りう閑雅のおもしろさ一時に消えうせなんこゝちこそする」（西ヶ原村夫）「只惜ム刈萱ノ一篇遂ニ終ヲ完フセザルヲ……君過レリ君過レリ何ゾ辨解ノ愚策ヲ取ルヤ君ノ聡明ニシテ彼拙策ニ出ツ余ノ驚ク所ナリ」（榮陰牧師）云々と酷評されるが、「真ハ筆にあらはれたり」と「秋の王」が評した通り、長々と弁明の言葉を連ねたがために却つて子規がおろくを憎からず思つていたこと―それが「或るローマンズ」と呼べるほどのものであつたかどうかは別として―が誰の目にも明らかになつてしまつたのは、なんとも皮肉なことであつた。

その後も子規はおろくと文通を続けており、おろくは子規の亡くなる

一ヶ月ほど前には根岸の子規宅に見舞に行ってもいるから、二人の交情は子規の亡くなるまで続いていたようだが、子規が「葬のまき」を創作することでおろくへの思いを昇華させようとしたと考えるのは穿ちすぎであろうか。

「葬のまき」の冒頭には「文中片仮名ノ処ハ詞、平仮名ノ處ハ節ト見ルベシ」という添え書きがあり、草稿段階では二箇所演出注記的な書き込みもあったことからすると、節付こそないものの、子規は単なるテキストとしての「謡」ではなく、演劇としての「能」を創作する意識でこの作品と向き合っていたに違いない。

ところで、本作には「夢幻」という小題がつけられており、これについて岡崎氏は「小題『夢幻』は末尾の地謡『姿は消てうた、ねの。夢かうつゝ、かまぼろしか』に由来し、さほど深遠な意味はないのである」と述べているが、^①本作の構成は「熊野松風は米の飯」というフレーズでよく知られた一場型夢幻能（松風）などと近い点があり、子規が夢幻的な世界を志向した結果、このような小題が付されたと考えられる。「夢幻能」という語が使われたのは大正十五年（一九二六）十一月二十八日、当時女子学習院教授であった佐成謙太郎によるラジオ講義「能楽の芸術的性格」が最初であり、それ以前には雑誌『能楽』明治三十八年（一九〇五）十一月号の如水生（池内信嘉）「能楽の分類」に「夢幻的のもの」「現実的のもの」「中立的のもの」という三分類が見えるばかりであるという。^②これらを考えあわせても、「夢幻能」なる概念が世に出るよりおよそ四十年前も前に、二十二歳の子規が能における「夢幻的のもの」を的確に把握していた事実には瞠目に値する。

三 構成と修辭をめぐって

「葬のまき」全体の構成は以下の通りである。なお、「葬のまき」は『子規全集』第九卷「初期文集」（講談社、昭52）所収。底本の形に忠実な本文校訂によって度重なる推敲が行われていたことが知られ、東北大学付属図書館蔵の『七艸集』子規稿と照らし合わせるとその推敲の過程をより詳細に追うことができる。ここでは最終稿の詞章を本文として用いることとする。

【第一段】ワキの登場

洋行帰りの書生（ワキ）が隅田川の花見を思い立ち、長命寺を訪れる。

【第二段】シテの登場

桜を一枝手折ろうとする書生を、花守の乙女（シテ）が制する。

【第三段】シテの物語

この桜に花守を置く理由を尋ねられた乙女は、かつてこの地に名物の桜餅を商う桜屋があつたが、向屋というライバル店の出現により没落し、それを嘆くあまり娘の花子が病の床に伏して身まかったこと、彼女の遺言通りに桜の木を植えたことなど語って聞かせる。

【第四段】シテ・ワキの応対

書生がかつて桜屋に寄寓していたと聞き、乙女は桜の木陰でさめざめと涙する。

【第五段】シテ・ワキの応対

『七草集』「薺のまき」私註

自分は桜屋花子の霊鬼であると乙女は自らの正体を明かす。なつかしさのあまり書生は花子に近づこうとするが、彼女に触れることはできず、夢のように儂いこの世を観ずる。

【第六段】シテの回想

花子は桜屋が没落するまでを回想し、儂くなった我が身と無常の世を嘆く。

【第七段】シテ・ワキの応対

書生の説法を聞いて妄執が晴れたかと思えた花子であったが、突然瞋恚の心が起こって髪が逆立ち、桜の木に走り寄って桜を睨み付け、咲き残っていた桜の花を悉く散らしてしまう。

【第八段】結末

書生の甲いにより花子は成仏を遂げ、桜ともども姿はかき消えて、あとには東雲の月が残るばかりであった。

【第一段】の「名ノリ」でワキは「コレハ一處不住ノ書生ニテ候。我レコノ程ハ西洋ノ國々ヲ經廻リテ、只今此東京ニ歸リ着キテ候」と名乗る。この「一處不住ノ書生」は能のワキとしてしばしば登場する「一處不住の僧」をもじったもので、子規が東京―松山を往還する自分自身の姿を擬えているのは言うまでもないが、明治三十四年（一九〇一）十一月六日付けのロンドンに留学中の漱石に宛てた書簡で

僕が昔カラ西洋ヲ見タガツテ居タノハ君モ知ツテルダロ。ソレガ病人ニナツテシマツタノダカラ残念デタマラナイノダガ、君ノ手紙ヲ見テ西洋ヘ往タヤウナ氣ニナツテ愉快デタマラス。若シ書ケルナラ僕ノ目ノ明イテル内ニ今一便ヨコシテクレヌカ（無理ナ注文ダガ）

と語っている¹³⁾ので、洋行帰りという設定にも子規の西洋に対する強い憧れが投影されていると考えるべきであろう。続いて

同「春の夜ハ夢はかりなる手枕の。橋打ち渡りふる里の。花そむかしの香に匂ふ。小梅のけしき三囲や。竹屋の渡を後に見て。塵の浮世は牛島の。長命寺にも着にけり。長命寺にもつきにけり

「春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなく立たむ名こそをしけれ」（『千載集』964番歌・周防内侍）から手枕―枕橋を導き、「人はいさ心も知らずふるさとは花ぞ昔の香にほひける」（『古今集』42番歌・紀貫之）から梅の連想で小梅―三囲―竹屋の渡とつらね、さらに「浮世（憂き世）」から「憂し・牛」と掛詞で「牛島」へとつなげる。いかにも能らしい道行文によって長命寺までの道程が描かれる。【第二段】で長命寺に到着した書生は、嘗て住んだ家が跡形もなくなっていることを知り、「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つはもとの身にして」（『古今集』747番歌・在原業平）と業平を気取って古歌を口ずさむ。桜の枝を手折ろうとして花守の乙女（実は花子の霊）に咎められる趣向は能の（雲林院）にヒントを得たものである。

【第三段】の「語り」は前半の間かせどころである。乙女は桜の木に花守を置くようになった理由を次のように語る。

シテ詞「左ラハ始終ヲ物語リ申サウズルニテ候。今ヨリ十年許リ前ト、カヤ、コ、ニ櫻屋ト申ス店ノ候ヒシガ。櫻ノ餅ヲ商ヒテ。百年アマリ世ヲ渡リテ候程ニ。自ラ此地ノ名物トナリテ候。然ルニ其頃ニ。向屋ト云フ店ノ此アタリニ出来候ヒテ。櫻ノ餅ヲ商ヒケルニ。

新シキヲ好ム浮世ノ癖トテ。客人ハ皆向屋ヲめで候ヒテ。桜屋ハ日々ニ衰ヘテ候ヘバ。此内ニ花子ト申シタル少女ノ候ヒシガ。此事ヲハ痛ク嘆キ候ヒテ。終ニ病ノ牀ニ臥シ。何時治ユビヨウモアラサリシガ。今ワノ際ニ人々ヲ招キ。我身此世ヲ去リシトキ。ソノ亡骸ヲバコノ処ニ埋メ。櫻ノ木ヲ一本植テ給ハレカシト。

同「それを名ごりの言の葉に。花もさかりと夕月の。満つるも待たで西に行く。浮世の夢ぞはかなき。

同詞「人々其遺言ノ如ク計ヒシニ。其木ハ年々ニ生ヒ茂リ。見事ニ花ヲツケテ候。然ルニ櫻屋ハ益々衰ヘ。僅ノ中ニうからども續イテコレモ世ヲ去リ申テ候。コ、ニ又不思議ナルハ。其頃ヨリ向屋ノ店モ。自ト人脚絶テ。ツゞイテコ、ヲ立チノキシカバ。今ハ寂シキ里ト変リ果テ。花見ル人モ稀ニナリテ候。

病の床にある花子が周囲の人々に自分が死んだら亡骸をこの場所に埋め、桜の木を一本植えて欲しいと遺言するくだりは、能（隅田川）の船頭が、都北白川から人商人に連れられてきた梅若丸が隅田川岸で病に倒れ、この道の辺に自分を埋めて塚を作りその標として柳の木を植えて欲しいと言いつつ残したことされたと言語「語り」の場面を換骨奪胎したものであり、これをきっかけに（隅田川）の本歌取りのな世界が展開していくことになる。

自分も昔「櫻屋ニ花ノユカリノ者」であつたと語り、浮世の儚さを嘆く書生。その姿を見た乙女は昔を思い出して涙にむせぶ。

シテ「御身もこゝにすみ田川の地」御身もこゝにすみ田川の。花のゆかりの其人と。聞けば耻かしくなく。思ひぞ出づる春の夜

の。あらはかなの契りやな。比翼の鳥。連理の枝。蓬萊の春のとしへに。飽くこと知らぬ人心。たがみよしの、よしの、山の山人と。なり見てしかなさく花に。あくやと見しまにちりにけり。夢かうつ、か春の風。雪ハ消にし木の下に、つもれる花こそ恨なれ。恨なれやさめぐと。花の陰にぞ泣きあたる

「花のゆかり」は「なにとなく年の暮るるはをしけれど花のゆかりに春をまつかな」（『金葉和歌集』299番歌・源有仁）などで知られる歌語であるが、能（杜若）に「さすがにこの杜若は、名におふ花の名所なれば、色も一しほ濃紫のなべての花のゆかりとも、思ひなぞらへ給はずして、取りわき眺め給へかし」という一節があるので、直接的にはこちらに依つたものかもしれない。「比翼の鳥。連理の枝。蓬萊の春のとしへに」と『長恨歌』や能（楊貴妃）中の詩句を引用することにより、かつてこの乙女と書生が相思相愛の仲であつたことを暗示する。続く部分は『金槐和歌集』58番・59番歌「みよしのの山の山守花を見てながし日をあかずも有かな」「みよしのの山に入れむ山人となり見てしがなはなに飽くやと」を本歌としており、さらに「桜花夢かうつつか白雲のたえてつれなき嶺の春風」（『新古今和歌集』139番歌・藤原家隆）を連想させる修辭を連ねている。なお、実朝歌に関しては【第五段】でシテが「何と答もなきさこく。あまの小舟のうきしづみ。沈みはてたるわが身の罪。浮む瀬もなき身ノ上を。今はつゝまじ我こそハ。櫻屋花子の靈鬼なり」と正体を明かす場面でも、『金槐和歌集』604番歌「世中はつねにもがもな渚こぐあまのを舟の綱手かなしも」を本歌として用いている。

『七草集』「葬のまき」私註

仰の如く近來和歌は一向に振ひ不申候。正直に申し候へば万葉以來実朝以来一向に振ひ不申候。実朝といふ人は三十にも足らず、いざこれからといふ処にてあへなき最期を遂げられ誠に残念致し候。

あの人をして十年も活かして置いたならどんなに名歌を沢山残したかも知れ不申候。とにかくに第一流の歌人と存候。(中略) 人の上に立つ人にて文学技芸に達したらん者は、人間としては下等の地にをるが通例なれども、実朝は全く例外の人に相違無之候。何故と申すに実朝の歌はただ器用といふのではなく、力量あり見識あり威勢あり、時流に染まず世間に媚びざる処、例の物数奇連中や死に歌よみの公卿たちとても同日には論じがたく、人間として立派な見識のある人間ならでは、実朝の歌の如き力ある歌は詠みいでられまじく候。
(明治三十一年『歌よみに与ふる書』)

短歌の革新に心血を注いだ子規が『歌よみに与ふる書』を著して旧來の和歌を激しく攻撃し、この中で第一流の歌人として実朝を高く評価したことは広く知られているが、本作品中に実朝歌を本歌とした修辭が多く用いられていることからすると、子規の実朝歌への傾倒は「葬のまき」以前から始まっていたということになるだろう。

乙女がいにしえの花子の靈だと知った書生は懐かしさのあまり駆け寄ろうとするが、花子の姿は幻のように遠ざかり、幽明界を異にする彼女に触れることはできない。

ワキ「さてハ花子かなつかしやと。よらんとすれハ
シテ「遠ざかる 地「姿ハかりのまほろしにて。ありとハ見れど帚
木の。今は此世になき魂も。まださめはてぬ妄執の。夢路に迷ふ有

様を。あはれと思ひ給へや。

地「袖うちかハし諸共に。ながめし春や梓弓。行きて帰らぬ隙の駒の。不老門前日月遅し。月も盡きじ。花もちらじ。あら面白と見しことも。さむれハ夢の浮世かな。今ハたゞ。流る、水こそ中々に。うらみなりけれ去る者は。かくの如しと観すれば。悟らぬ事ぞ愚なる。

【第五段】は(隅田川)の後半、弔いに引かれて塚の中から現れた梅若丸の亡霊に向かつて手をさしのべるがその姿は消え消えとなつて、我が子と手を取り合うことができず母が悲嘆にくれる場面を下敷きにしたものである。「ありとハ見れど帚木の」云々は「園原や伏せ屋におふる帚木のありとは見えてあはぬ君かな」(『新古今和歌集』坂上是則)が本歌とひとまずは考えられるが、「あるはかひなき帚木の、見えつ隠れつ面影の、定めなき世の習ひ」(隅田川)、「よそにてはまさしく見えし帚木の、蔭に来て見ればなかりけり」(木賊)など物狂能では馴染みの表現である。さらに「春」「梓弓」と縁語を連ね、「隙の駒」(『莊子』)や「長生殿裏春秋富、不老門前日月遅」(『和漢朗詠集』卷下「祝」慶滋保胤)を引用してこの世の無常を語らせる。

シテ「花ちらす。風のやとりハたれか知る。我に教へよ恨をば。
地「いふよしもなき假の身の。思へハはかなき有様かな。げにや昔の春の日に。花戯れ花笑ひ。行けどもぐく白雲の。つきせぬ隅田の花堤。風に動かす花の唇。さながら物いふ風情にて。人を送り。人を迎ふや向じま。花も実もある櫻の餅を。買ハせ給へや買ひ給へと。す、むれと人ハ皆。かなたへ向ふ屋ハいや榮え。櫻ハ名のみ櫻

屋ハ。花をむかしのあるじにて。春も空しき名にこそありけれ。仇にちりにし花なれハ。落ても水の泡となり。消てあとなき波の上に。人もあハれと都鳥。我ハ昔を忍ぶずり。みたれくるしき黒髪の。もつれてとけぬ思ひをバ。知りたる人や在原の。朝臣の歌も涙なり。都八日々に栄ゆれと。隅田の川の春風ハ。昔の姿。ありやなしやと事問ば。都鳥ハ。いかに答へん

シテが往時を回想する【第六段】では、「花ちらす風のやどりはたれかする我にをしへよ行きてうらみむ」（『古今和歌集』76番歌・素性法師）「枝よりもあだに散りにし花なれば落ちて水の泡とこそなれ」（『古今和歌集』81番歌・菅野高世）や「誰か謂つし花ものいはずと 輕漾激して影脣を動かす」（『和漢朗詠集』巻上「花付落花」菅三品）を引き、後半では「都鳥」「忍ぶずり」「みたれくるしき」「在原の朝臣」「ありやなしやと事問ば」と、「源氏詞」ならぬ「伊勢詞」を付合風に次々とたたみかけ、『伊勢物語』の世界をオーバーラップさせていく。さりげなく「人を送り人を迎ふや向じま」「人は皆かなたへ向ふ屋」と秀句めいた修辞を織り込んでいるあたりには子規の茶目つ気も感じられる。

花子の述懐を聞いた書生は彼女の妄執を晴らすべく、「根塵同源縛脱無二。識性虚妄猶如空華と。佛も説かせ給はずや（中略）本来一物なき物を。無明の酔のさめずして。迷ふ心ぞ笑止なれ」と説いて悟りへ導こうとし、花子もひとたびは「まことに尊き御法かな。智慧愚癡通為般若と聞く時ハ。我等も終には佛にやなるらん」と一旦は成仏するかにみえた。「根塵同源縛脱無二。識性虚妄猶如空華」「智慧愚癡痛為般若」はともに『大方広円覚修多羅了義経略疏注』中の文言。『大方広円覚修多羅了義経』（『円覚経』）は禅宗で重きを置かれた經典であるが、「又根塵同根

縛脱無二四河入海云々を仏道本論の著者得庵居士より習ひ得たる故（全く余の想像中らずハ免したまへかすと祈る）此文句を利用して見ばやとて起草せしにハあらざるかと見たハ僻目歟」という「秋の王」の指摘（『七草集評』）があるように、子規は禅に通暁していた鳥尾得庵（小弥太）よりこれを学んだのであろう。

ワキ「知るやいかに。蜉蝣を天地によせて。

シテ「渺々たる青海原の。一粟なりと見る時ハ。

ワキ「哀れはかなき人の身の。

シテ「なほうらやまんかぎりなき。墨田の川も

ワキ「流れてハ。生死の海の境なく。

シテ「四河入海同一鹹味。

地「今ハはや恨むべき事もなし。されど思ひハ中々に。消ても消ぬ煩惱の。焰の残るこの花の。赤き色こそうたてけれ。いざさらバ。散らば散らなんちらずとて。誰か訪ひ来たるべきと。櫻の陰に走りより。髪さかだて、にらむとみれば。さきもそろひし櫻の花の。見らく空にひるがへり。散りて残らぬ有様は。げに恐ろしき風情かな

【第七段】で書生はさらに「駕一葉之輕舟、拳匏樽以相蜀、寄蜉蝣於天地、渺滄海之一粟」（蘇東坡『赤壁賦』）を引いて人の身の小さく儚いことを説き、妄執に迷う花子を救おうとする。しかし桜の色に瞋恚の焰を呼び覚まされた花子は、やおら「髪さかだて、」桜を睨み付けるのである。「散らば散らなん…」は「さくら花ちらばちらなむちらずとてふるさと人のきても見なく」（『古今和歌集』74番歌・惟喬親王）を本歌とし

『七草集』「葬のまき」私註

た表現。桜が散らずに残っていても、それを見に来る人などいないという寂しい境遇を思い起こし、それが彼女を狂気へと駆り立てる。逆立つ髪といえは〈蟬丸〉の逆髪がすぐに思い浮かぶが、花子の形相が変わっていく様子はむしろ〈鉄輪〉の第四段・シテの中入前の

地「云ふより早く色かはり、く、気色変じて今までは、美女の形と見えつるが、緑の髪は空さまに、立つや黒雲の、雨降り風と鳴る神も、思ふ中をば避けられし、恨の鬼となつて、人に思ひ知らせん。憂き人に思ひ知らせん。
(岩波日本古典文学大系『謡曲集』下)

を髻髷とさせるし、花子に睨み付けられるやたちまちに桜が散る場面の描写は〈富士太鼓〉の第六段・シテ狂乱の場面

地「持ちたる撥をば剣と定め、瞋恚の焰は太鼓の烽火の、天に上れば雲の上人。まことの富士嵐に、絶えず揉まれて裾野の桜。四方へばつと散るかと思えて、花衣さす手も引く手も、伶人の舞なれば。太鼓の役は。本より聞ゆる。名の下空しからず。たぐひなやなつかしや
(新潮日本古典集成『謡曲集』下)

の傍線部と非常に似通っており、これによって狂女としての花子の姿が俄然迫力をもってくる。花を悉く散らして恨みを晴らした花子は書生の回向によって「あら有りがたや。今ハ思ひおくことなし」と成仏を遂げるが、このいささか唐突かつ都合主義的に思われる結末も、能においてはいわば常套手段であり、〈葵上〉や〈卒都婆小町〉などいくつも類例がある。最後の「夢かうつ、かまほろしか。仰げば残る真如の月の。墨

田の波にゆられく。ほのく、あくるあけほの、。けしきぞいとゞあはれなる。けしきぞいとゞ哀れなり」は〈隅田川〉の第八段、

地「互に手に手を取り交はせば、また消え消えとなり行けば、いよ思ひは真澄鏡、面影も幻も、見えつ隠れつする程に、しののめの空もほのぼのと、明け行けば跡絶えて、わが子と見えしは塚の上の、草茫茫としてただ、しるしばかりの浅茅が原と、なるこそあはれなりけれ、なるこそあはれなりけれ
(岩波日本古典文学大系『謡曲集』上)

と響き合う表現であり、ここで読者は花子の面影を胸に茫然と東雲の月を見上げる書生の姿に思いをいたすとともに、〈隅田川〉の世界が「葬のまき」に一貫して流れる基調低音となっていたことに改めて気付かされるのである。

シテの花子がこの世に妄執を残している理由がいささか曖昧であり、ワキの書生も説法の抹香臭さが鼻について洋行帰りとは思えない。その結果一曲のテーマも漠としてしまっていて物足りなさが残りはするものの、ストーリー展開に主眼を置いた小説の形をとるのではなく、能の形式を借りることによってこの物語に深い余韻を与えることに成功しているし、〈隅田川〉の世界をベースにしながらさまざまな能の趣向を取り入れ、『伊勢物語』からの引用をはじめ古歌や漢詩の本歌取りなど古典的なレトリックを駆使して格調高くまとめあげてしまったその手並みは見事と言うほかない。子規は「余二三の人に向ひて大胆にも『七巻中に少しにても取るべき処ありと思ひ給ふ巻ハ何なるや』と問ひしに皆葬の巻と答へたり」と自慢げに記しているから(『七草集評』「批評聞き書き」)、

本作の出来映えが子規自身にとつても満足のゆくものだったことは確かである。

四 『七草集評』にみる「薺のまき」評

子規は『七草集』の巻末に白紙を綴じ付けて友人らに回覧し、各人から批評を集め、口述筆記したものや書簡なども加えて批評集『七草集評』を編んだ。各人の「薺のまき」評を見ると、この作品が子規の周囲の人々にとどのよう受け止められていたかがよくわかる。

予未だ能を知らざる故、此巻読去読来して評すること能はず。只君の凡能に驚き、深く予の不能を慚す。呵々 (笑天道士・原漢文)
余知らざる故評すること能はず。読去読来して只忙然自失、君の博聞に驚くのみ (採花弄史(佐々田八郎)・原漢文)

薺の巻ハ先づ癡仏殿司の該博なるに驚きたり目先き変りて餘ッ程妙的なり榮枯盛衰ハ浮世の常態と申ながら一昔餘りにて此有様とハ情なし／＼会ふは別れのはじめ。何処のはてにて死ぬるやら、この事を思ひ出だせバ転た凄然の念ある時もあり又思ひ返してハ誠に愉快ならずやとて反動を起す事もあり夢幻のみ真に浮世は夢幻のみ。

(梨の屋つぶて)
又朝兒の巻なるヒュードロ／＼ハ「西洋諸国を経廻り」とあれば曾て江東に寓居せしと聞く大人の叔父君を思へ出てたるにやあらんさらずは又根塵同根縛脱無二四河入海云々を仏道本論の著者得庵居士より習ひ得たる故(全く余の想像中らずハ免したまへかしと祈る)此文句を利用して見ばやとて起草せしにハあらざるかと見たハ僻目

歎実に僻目の僻目なるべし大人の所謂疑ふて疑はれぬものやハあると同じく全く想像なり疑なりナ心に留め給ふなよ

あさかほのまき

入相の鐘

(秋の王)

朝顔ノ一篇ハ想像ニ出テ、専ラ感情ヲ写出ス説起結局屈折連鎖甚巧妙ナリ西行桜ヲ読ムノ感アリテ凄然一層勝ル…余巻頭ヨリ読ミ起シテ朝顔ニ至リ大呼シテ曰ク正岡君ノ妙思爰ニ至ルカト

(栄陰牧師)

少年詩を能くし文を能くし歌を能くす。多芸多才。薺之巻の如きは、特に其の工を見る也。

(青龍・原漢文)

謡曲則ち未だ曾て之を試みず、岡君之奇想風流天外より来るは真に愛翫すべき矣

(楠谷服陳(服部嘉陳)・原漢文)

薺や摘見て濡れぬ袖ハなし

(障若庵)

薺の巻をよみてハ前の批評家もいへることく大人の該博なるに驚きぬその言葉の品よくみやびやかなるハ真のものにみまがふばかりにておのれハこの薺のまきこそ六草の中の白き眉なるべけれど思ふなり

(無始無終楼主人)

浅顔の垣根を今少し手入たれば眺めことなるべし

(江田島守)

薺花卷

古人ノ句ニ一年の月をくもらす今宵哉ト余亦此巻ニ於テ謂ハント欲ス曰ク朝兒ハ七草の色奪ひケリト実ニ秋花七篇中ノ出色ノ作ト云フベシ鄙見ヲ以テスレハ瞿麦篇ノ如キ優ニシテ美ナルモノアレトモ全篇ノ結構辞句ノ排置文字ノ流麗音ニ天淵ノミナラサルナリ殊ニ「ワキ」ト称スル者ノ如キ一層ノ妙致ヲ見ル蓋シ子規其ノ人ノ如キ之ヲ錦心綉口ト云フヘキ耶

(蟠松狂夫(武市庫太))

『七草集』「薺のまき」私註

括弧内のように、皆冗談めいた筆名を用いているため、残念ながら評者の半数以上の本名が明らかでない。自分は謡曲に暗いためこの巻を批評のしようがないと匙を投じている者あり、子規の該博ぶり・多芸多才ぶりに舌を巻く者あり、その趣向の巧みさを褒める者あり、実にさまざまな感想が寄せられているが、「西行桜」を髣髴とさせると能との関連を具体的に指摘しているのが栄陰牧師ばかりなのはいささか寂しくもある。そんな評者の中で「薺のまき」にもっとも深い感銘を受けたのは漱石であつたらしい。明治二十二年（一八八九）五月二十五日、漱石は病床の子規から借りてきた『七草集』に漢文で次のような評を記している（引用は島森哲男氏の読み下しによつた）。

薺の篇は則ち筆意悽惋、文品も亦自ら高し。読み去りて覚えず黯然たり。嗚呼、天地は一大劇場なり。人生は長夢の如し。然れども夢中猶声色を弁じ、俳優能く人を泣かしむ。僕此の篇を読み、其の仮想に出づるを知ると謂も、然れども酸悒の情無き能はず。況んや身其の境に在りて、目其の事を睹るに於てをや。抑も人事の変、桑滄の遷、誰か其の真仮を弁ぜん。曷んぞ吾兄十年の後、再び墨江に遊び、往昔を追憶して、先の仮の後の真と為り、昔の幻の今の実と為り、低徊願望、感極まり泣下る者無きを知らんや。又曷んぞ香雲暖雪の下、今昔の感に勝へずして、詩を作りて阿花を弔い、忽々として失ふが若く、詩を捧じて嗚咽する者無きを知らんや。

島森氏が既に指摘しているように、「天地は一大劇場なり」はシェイクスピアの "As You Like It" Act.II.Sc.7の "All the worlds a stage, And all the men and women merely players." に、「人生は長夢の如し」は "The

Tempest" Act.V. Sc.Iの "We are such stuff as dreams are made on, and our little life is rounded with a sleep." に拠つた表現である。他の評者が専ら子規の博覧強記ぶりに感嘆しているのに対し、漱石は人の世の移り変わりの早さや虚実の測りがたさを「薺のまき」の主題と捉えて絶賛し、いずれこの作品で書いたことが真実になるかもしれないとまで記しているのだが、謡曲を評するにシェイクスピア劇の台詞をもつてするあたり、なかなかの洒落つ気が感じられる。漱石が虚子の紹介で宝生新に謡を習うようになるのはまだ先の話であるし、子規と共に松山の芝居小屋で照葉狂言を見るのも明治二十八年（一八九五）十月のことだが、子規の知遇を得てほでない漱石が「薺のまき」によつて能への関心をかき立てられたことは確かであろう。ちなみに漱石は『七草集評』の末尾に「僕豈に敢へて響に倣ふと謂はんや。亦だ西施の美を為さんと欲する耳」との謙辞を添えて七言絶句九首で和しているが、その最後を

長命寺中 餅を鬻ぐ家
當墟の少女 美しきこと花の如し
芳姿一段可憐の處
別後 君を思ふて 紅涙加はる

という詩で締めくくっている。「薺のまき」の花子へのオマージュの如く見せかけておいて、その実「君が去つた後で君を思つて紅涙を流している彼女の姿はまたひとしお美しい」とはおろくと子規との仲を冷やかしたものの。こんなところにも漱石一流のユーモアが顔を覗かせている。

五 むすび

子規の生まれ育った松山では藩主松平家の影響ではやくから能楽愛好の風があった。また、子規の叔父藤野漸は池内政忠(信夫)にワキ方下掛宝生流を習い、八世家元の宝生新朔からは免許皆伝を受け、家元後見格の立場で新朔・金五郎・新の三代と関係を持っていた。幼く少年期の子規はこのような環境下で、いわば謡を子守歌のようにして育っていったのである。子規に兄事した高浜虚子が能に造詣が深かったことはよく知られているが、虚子の父池内政忠は下掛宝生流の謡をよくし、明治維新後松山の能の保護のため奔走した人物で、その跡を継いだ次男の信嘉(虚子の兄)も後に能楽振興維持を決意して上京、能楽倶楽部を設置して楽師養成に尽力し、明治三十五年(一九〇三)七月に雑誌『能楽』を刊行している²⁰⁾。

郷里松山には毎年二・三度づ、東雲神社に於て奉納能楽ありし故、余も時々見物に出かけたり。はじめよりすきはすきなりしかども、其すきといふは鬼や幽霊の出る為にして、太鼓さへ聞けば面白しと思へり。故に現在物などは尤きらひなりき。其後出京後直ちに紅葉館に行きて一見したるが、其時もまだ十分の嗜好なし。されど藤野叔の内にゐること長く、従ひて謡ひは度々聞きしことありて何となくうれしく感じるなり。四五年を経て多少謡曲などの話を聞く度に其趣味あるを悟り、いつか一度見たしとのみ思ひしが、此春不図機会を得て、藤叔と共に紅葉館に行き能楽を見たり。

〔筆まかせ〕第三篇²¹⁾・明治二十三年

文中の「紅葉館」は明治十四年(一八八二)に開館した芝公園能楽堂のこと。「藤野叔の内にあること長く」とあるように、明治十六年(一八八四)六月に上京した子規は、その後東京の藤野家に寄寓し従兄弟の潔と共に須田学舎に通っていたので、この間に叔父の謡をしばしば耳にしたのだろう。「四五年を経て」「其趣味あるを悟」ったのはまさに『七草集』の執筆時期と重なることになるのだが、『七草集』を回覧した子規の友人の多くがその評で謡曲に心得のないことを白状しているのとはまことに対照的である。

能への関心を一層深めた子規はその後「羽衣」に材を取った小説「月の都」を執筆して幸田露伴に批評を乞うも芳しい評価は得られず、小説の道を諦めてしまうことになるのだが、「薺のまき」の出来映えを見る限りにおいては、子規は小説文よりも能の文体においてこそその本領を発揮し得たのではないかと思われる。子規を師と仰いだ虚子は〈鉄門〉〈実朝〉〈奥の細道〉などの新作能を残しているし、土岐善麿も喜多実の求めに応じて〈夢殿〉〈青衣女人〉などを作った。また、近年では石牟礼道子〈不知火〉の上演が記憶に新しい。歌人による新作能は現在に至るまで作られ続けている。若き子規の習作「薺のまき」は、彼の創作におけるひとつの可能性を拓いたばかりでなく、新作能の流れに先鞭をつけた画期的な作品といえることができるのである。

【注】

- (1) この年の夏に「蘭之巻」から「薺のまき」までの五篇と「かる萱の巻」を書き、その年の終わりに「葛之巻」、翌二十二年に「瞿麦の巻」を書いて「かる萱の巻」をはずしたという経緯がある。
- (2) 『子規全集』第九卷「初期文集」(講談社、昭52)
- (3) 『七草集』の考察(『人文科学論集』第9号、昭50・2)

『七草集』「薺のまき」私註

- (4) 河東碧梧桐『子規の回想 新装復刻』附録「母堂の談片」(沖積社、平10)
- (5) 岡崎正「子規と謡曲」(『駒沢短大国文』第21号、平3・3)、木佐貫洋「子規の俳句と能」(『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』第3号、平14)
- (6) 注4前掲書
- (7) 寒川鼠骨「子規と恋」(『文学』22・4、昭29・4)によれば、この噂はその後戯曲『子規の恋』や『小説子規』などで取り沙汰されたようである。
- (8) 宮川康雄「『無何有洲七草集』批評集」(『東北工業大学紀要』第3号、昭42・7)
- (9) 野田宇太郎「花の香」(『子規全集』第二十卷・月報12、昭51・3)
- (10) 「お陸余聞」(『子規全集』第二十卷・月報12、昭51・3)
- (11) 注5岡崎論文
- (12) 田代慶一郎『夢幻能』(朝日新聞社、平6)
- (13) 『子規全集』第十九卷「書簡二」(講談社、昭53)
- (14) 『子規全集』第七卷「歌論・選歌」(講談社、昭50)
- (15) 注8宮川論文
- (16) 注8宮川論文
- (17) 島森哲男「漱石『七草集批評』注釈」(『宮城教育大学国文』第15号、昭60・8)
- (18) 夏目金之助「稽古の歴史」(雑誌『能楽』第9卷11号、明44)
- (19) 『散策集』(『子規全集』第十三卷「小説・紀行」講談社、昭51) 明治二十八年十月六日条には、子規と漱石が道後温泉の帰りにては狂言を見て、上演された演目を題に句を詠んだ旨記されている。
- (20) 稲畑汀子「虚子の俳句と能楽に見る極楽の思想」(『能楽資料センター紀要』No.16、平17・3)
- (21) 『子規全集』第十卷「初期隨筆」(講談社、昭50)